

第6回 緩い「つながり」の遠隔教育

「私は通信教育で救われました」

これは、社会通信教育の受講者で文部大臣賞（当時）を受賞したビジネス・パーソンの言葉です。

この方はうつ病のため長期入院を強いられ、毎日、ぼんやりとした不安のなかで療養生活を重ねていました。もんもんとした生活で、なにもやる気にもなりません。見るに見かねたのでしょうか、医師から通信教育をやってみませんか、と勧められ、社会通信教育のパンフレットを渡されました。通信教育には興味もなかったし、特別に学びたい分野もありませんでした。しかし担当医師から熱心に誘われたので、学べそうな実務統計の講座を始めました。

統計に特に興味があったわけではなかったようでした。ただ、療養のルーティンに従うように、印刷教材や機関紙を読み、練習問題を解き、レポートを書き、添削指導を受けました。そのうちにこれまで経験したことのない暮らし方をしていることに気づきました。読んだり例題を解いたりしているときは、病気のこと、慌ただしい仕事のこと、家族のことなどを忘れていて自分を発見することができたのです。返送されてきたレポートの成績や評価をよく読み、教材の復習をし、また返送し直しました。実務統計に興味をもてるようになったというより、通信教育の講座の学習に没頭できたので、逆に今までの視野狭窄に気づき、その「とらわれ」から解放され、少しずつ治癒していったそうです。

社会通信教育ではスクーリングや面接指導はありません。ですから、実施団体、その支援者たちもメディア（上の事例では郵便や電話のみ）を活用し遠隔学習の支援をしています。例えば、添削指導者はレポートの評価だけではなく、受講者一人ひとりに向けたメッセージを添えます。通り一遍の「よくできました」ではなく、「〇〇さん、今回はよく努力されたことがわかります」という私信のようなメッセージを添えます。正解の周辺にある知識を添えることもあります。具体的に、教材の〇ページを読み直してください。間違ってもいいですからまたレポートを送ってください、というような助言を添えることもあります。ちなみに、レポートには学習して感じたことを書く欄も設けている講座もありますから、この感想を参考に添削者は評価とは別に返事も添えていたのです。

通信教育の弱点は学習の継続がむずかしい、途中で脱落する人が多いことです。しかし、このようなブーメランのようなメッセージの相互交流があると、受講者は学習を継続します。実施団体も修了期間の延長などの配慮をしています。スクーリングも面接指導もありませんから、遠隔教育だけでできるサービスを展開しています。もちろん、近年はメールでの「やりとり」、動画配信、DVDもあります。

先の受講者はこうした「やりとり」をしているうちに、病気と格闘しながらも、通信教育に熱心に取り組みはじめ、大臣表彰を受けるに至ったのでした。療養生活も終え、職場にも復帰、表彰式で初めて会った私にはうつ病に苦しんでいた方とは思えませんでした。また、実施団体の代表者には側面から支援してくれた感謝の言葉を繰り返していました。

「間柄」より「事柄」に専念

この種の事例を大学通信教育でも経験しましたので、通信教育にはある種の治癒力があるように思えます。もちろん通信教育で病気が治るなどと言うものではありません。しかし、医療も究極的には本人の自然治癒力で依存するように、学習支援も学習者のもっとよく学びたい、もっと善く生きたいという、本人も自覚していないような本心を援助することにあるのではないのでしょうか。

世の中はこの本心を抑えるメカニズムが働いています。日本人の人間関係です。うつ状態で悩んでいる患者さんの主因は人間関係があるといわれています。職場の上司や同僚や部下との対立・軋轢を避けるために、自分の主張や希望を抑制しようとする傾向があります。いじめを受けたり不登校になったり生徒たちは、教師や友人などに気づかいすぎ、相談したり質問したりできなくなります。こうした傾向が続くと、人はいつも緊張関係を強いられストレスをため込んでいきます。

タテマエでは個性重視といいますが、個々の企業文化や個々の学校文化に合った個性でないと居心地が悪くなります。先行研究が明らかにしてきたように、日本ではいわゆる「空気」を読まなければなりません。職場、授業・部活、お隣さんの「空気」を意識した協調性が求められます。転職、引きこもり、不登校などはこうした「空気」からの緊急避難ともいえます。

また、高いコミュニケーション能力が標榜されていますが、やっかいなことがあります。日本語の対面コミュニケーションでは話し手と聞き手との人間関係を組み込ませる機能が働きます。この「磁場」では、尊敬語、謙譲語、タメ口などを駆使しなければなりません。匿名SNSの書き込みが自由なのは、逆に、対人関係を意識せずに発信できるからでしょう。「千円からお預かりします」調のコンビニ用語も、対面する客との関係を意識せずに言える表現だからです。逆に、対面コミュニケーションの場で日本語の機能に引きずられると、対等な会話ができない状況が生まれます。率直な意見や才気走った質問はご法度、という職場や学校は少なくありません。

先の事例が示すことは、通信教育で学んでいるかぎり、その時には職場や学校や家族などの人間関係からいったん離れる場ができます。職場や学校のように相手との間柄から学ぶのではなく、事柄だけから学べばいいのです。音楽療法や園芸療法は、楽器や草花と自分とだけ向い合っていればいい関係を用意します。事柄の真偽や正誤からだけ学び、上司や教師との間柄、相手の人柄に縛られずに、学べます。

とりわけ社会通信教育では評価はあっても単位、資格取得、卒業資格などを求める受講者はいませんから、コミュニケーションも対等です。基本的にはテキスト（文字・数字、音声、映像モードなどを含む）の「やりとり」だけです。この「やりとり」が進行するうちに受講者と指導者・支援者との「つながり」も形成されていきます。また、指導者・支援者も「つながり」が中断しないように、プーメランのごとくに、受講者への1対1の応答を懇切にする必要があります。もちろん受講者は学生・生徒ではありません。消費者ですから、クレームもあり

ます。懇切な対応を怠ればビジネスも成立しません。

つまり、遠隔教育の特長はいったん人間関係から離れ、事柄（学習内容）から学ぶことができる点にあります。また対人関係を意識した場ではないので、客観的な記述ができ、対等な相互交流が可能です。しかも読書やブログとは異なり、書いた文章に対し専門家からコメントが戻ってくるので、自己流の理解が避けられます。前述のように、解答への評価だけでなく、インフォーマルな助言が得られることもあります。こうした複合的な「やりとり」があれば、生身の人間教師でなくとも、メディアを通じて、ほどよい「へだたり」（遠隔）のある人間関係、緩い「つながり」が得られていきます。この緩い「つながり」から新しい堅い「つながり」も生まれますし、緩い「つながり」で学び続けることもできます。

第4回の提言で、井上恭宏会員が「通信制（高校）に来てからは先生とよく話をするようになった」という生徒の声を紹介しています。その理由は「『教える』ということと同時にレポートに『一緒にとりくむ』という雰囲気が出てくる」点にあると指摘しています。単位の認定、進学・卒業がある高校の通信教育課程でも、社会通信教育のように、共に学び合う方向は可能なのです。同時に、メールだけの「やりとり」ではなく、適宜、面接指導で補完している実態が報告されています。

対面方式から遠隔方式へ

「間柄」や「人柄」を軽視した「脱人間」の遠隔教育でクールな「無縁社会」をつくろう、というわけではありません。世の中が困難な状況に陥ると絆、堅い「つながり」が強調されます。心情的にはわかりますが、この堅い絆は内輪だけの、排他的な「つながり」になりかねません。

大学通信教育のスクーリングや学習会でよくこんな光景を見ました。あるグループが仲間として親しく話しています。久しぶりに再会できたうれしさと、仲間内だけで通用するジャーゴンなどで盛り上がっています。しかし、この盛り上がりには圧倒的に多い他の出席者——もちろん社会人や高齢者——はかえって孤独感・疎外感を味わいます。なかには不快感をもつ学生さえいます。私は教員としてこの「空気」をなだめる役割を果たしていました。教員としては一部とはいえ連帯感の強い受講者がいることは講義や演習を進めやすいのですが、圧倒的に多い他の受講者に「アウェイ感」をもたせないよう調整をしたものです。

社会人を対象とした遠隔教育では、対面教育においても緩い「つながり」が必要です。かつてグラノヴェターは「弱い紐帯がもつ強さ」を提起しました。「強い紐帯」は情報を閉鎖的にするが、「弱い紐帯」は新鮮で有益な情報が得られる開放的ネットワークを形成する、という仮説です（注1）。先の事例も、社会通信教育で学ぶことによって職場や家族の堅い「つながり」からいったん離れることができた、といえます。テキストやレポートを通じて添削指導者やその団体と緩い「つながり」と「やりとり」ができたのです。

やむを得ない状況からとはいえ、緩い「つながり」を促す「ナッジ（nudge 小さな誘導）」が展開されつつあります。「理性の狡知」というべきか、デジタルな「やりとり」で緩い「つながり」が始まっています。

例えば、企業においても在宅勤務、テレワークが実際に導入されています。同一の時間に、同一の場所で、社員一丸となって励むシステムは変わりつつあります。長く慣行化してきた通勤というシステムも、在宅勤務でも可能であることがわかってきました。わざわざ本社に全国の新人社員を集合させて行ってきた新人研修も、テレワークとして実施されつつあります。

「ハンコ・紙・面談」のお役所仕事もデジタル化へ移行する措置をとり始めています。医療も遠隔方式で相談、投薬が可能になりつつあります。日常的な買い物も宅配で代替可能であり、遠隔方式によるショッピングが活発になってきました。

したがって、対面の場でしか学べないと思われてきた暗黙知も、言語化・映像化し遠隔方式で伝達することが可能であることがわかってきました。

もちろん、「空気を読む」ような非言語コミュニケーションの言語化は難しいでしょう。人と膝を交えて話す会合などでは、話の内容よりも相手の口調やゼスチャーなどから話し手の感情も理解しなければなりません。話し手も、聞き手たちの顔の表情や姿勢などから、場の雰囲気を感じながら、話を進める必要があります。この非言語コミュニケーションも重要な意味があります。こうしたメッセージとメタ・メッセージの複合的なコミュニケーションをなんでも言語化・映像化できるわけではありません。言い換えれば、形式知による遠隔方式での伝達の比重を高めれば高めるほど、形式知に変換できない暗黙知が発見され、その重要性も相対的に高く評価されるでしょう。職場での仕事、教室での対面授業の重要性が再認識されるでしょう。

さはさりながら、現下の状況は遠隔方式の「ナッジ」が進行しています。

通学方式の大学でもオンライン授業が積極的に採用しています。田島貴裕会員の提言にあるように（第3回）、通学課程でも遠隔授業は以前から法的に可能になっています。井上恭宏会員（第4回）や土岐玲奈会員（第2回）も分析しています。一通学課程の高校でも、小・中学校でも部分的であれ、特別のケースであれ、以前から法的に通信教育や在宅学習が可能である、と。小・中・高等学校、大学で、学習塾や予備校も急ごしらえながらオンライン授業を実施しています。

遠隔教育の導入は、現在の法制でも可能なのです。今（5月3日時点）、「9月入学制」が議論されつつあります。このような対面教育の「改革」より遠隔教育の導入・実施のほうが法制的にも現実的なのに、です。

対面教育という岩盤

しかし、です。対面教育という岩盤、通学方式という岩盤が容易には崩れません。高等教育では遠隔教育を導入しませんでした。通信制大学院（修士課程）が導入されて20年。戦後、70年あまりの通信教育の歴史があるのに、です。小・中学校、高校でも同じです。学習塾や予備校などの民間の業者は導入してきた実績がありますが、正則の「学校式教育」では対面教育偏重です。古壕典洋会員（第1回）が思い起こさせた終戦後、教育の機会均等をうたって生まれた社会教育も、公民館へ通う、カルチャーセンターへ通う学習支援でした。社会通信教育の振興は衰退し、受講者数は減っています。

私たちの「教育」は明治以来、対面教育・集団教育という岩盤を形成してきました。

ただ、先のような「ナッジ」は生まれています。通勤の偏重、有給休暇もとれない「通勤制度」の岩盤には亀裂が入ったようです。明治期からの通学方式が下支えしてきた「通勤制度」が在宅勤務やテレワークで代替可能であることが実証されていけば、通学方式・対面方式も変わるかもしれません。

ソーシャル・デスタンスが推奨されています。私はそれが「心理的距離」の再評価につながってほしいと考えています。繰り返しますが、緩い「つながり」、「弱い紐帯」の意義です。

明治政府が批判した幕藩体制のもとでも、身分制社会でも、趣味の仲間、詩歌・芸能などの組織では身分を離れ、私的な領域をつなぐ「弱い紐帯」が容認されていたという実証的研究があります（注2）。徳川期の固定した秩序の内部でも対等なコミュニケーションがあったとの研究です。開放的な民主的社会を標榜する社会でも、この江戸時代の知恵に学ぶべきだと思えます。明治以来の、戦後も持続した「学校式教育」偏重の対面教育の岩盤を崩すことができる知恵がここにあります。

白石 克己（元・佛教大学）

注

- 1 M・グラノヴェッター（渡辺深訳）：転職ーネットワークとキャリアの研究 ミネルヴァ書房 1998
- 2 池上英子：美と礼節の絆ー日本における交際文化の政治的起源 NTT出版 2005

